

TAKE FREE

一人一品

作曲家・ピアニスト 杉原一平

ピアノ曲

「アクアAcqua ~マリアノMariano フォルテニイFortuny~」



服をめぐる

衣服の研究現場より

08

服をめぐる 08

一人一品

杉原一平 (作曲家・ピアニスト)

アクア

ピアノ曲 「Acqua~Mariano Fortuny~」

マリファナ
フォルテチエニイ

p4

KCI Wunderkammer

着せ替え人形

p12

地産街道を行く⑧

奈良 貝ボタン

p14

今日の補修室 第8回

衣装補修のビフォー・アフター②

p20

KCI活動報告

p22

PEOPLE

旅先で入手した服飾品の
思い出を教えてください。

p24

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「モードのジャポニスム」展、「身体の夢」展、「FUTURE BEAUTY: 日本ファッションの30年」展など)や、研究誌(『DRESSSTUDY』、『Fashion Talks...』)の発行を通じて公開しています。
Website <http://www.kci.or.jp/>



「身体の夢」展 京都国立近代美術館 (1999年)
©The Kyoto Costume Institute, photo by Naoya Hatakeyama

表紙の収蔵品



『Modes et manières d'aujourd'hui (今日モードと着こなし)』より
「LA RYTHMIQUE (リズム体操)」
出版社: Jules Meyniel Libraire, Paris
発行年: 1919年
発行地: パリ

本品はビエール・コラールによって1912年に創刊され23年まで続いたアート誌『Modes et manières d'aujourd'hui』のなかの1ページです。本誌は年に1回の刊行(第一次世界大戦中は休刊)で、毎号イラストレーターと作家を1名ずつ起用した豪華な誌面づくりが特徴です。本号では当時ファッション・イラストで名を馳せたアンドレ・マルティと劇作家のトリスタン・ベルナルが起用されました。

あるドレスから
生まれた一曲

著名人が各々の目を通し、K C I の収蔵品を語る「一人一品」。今回のゲストは作曲家・ピアニストの杉原一平さんです。

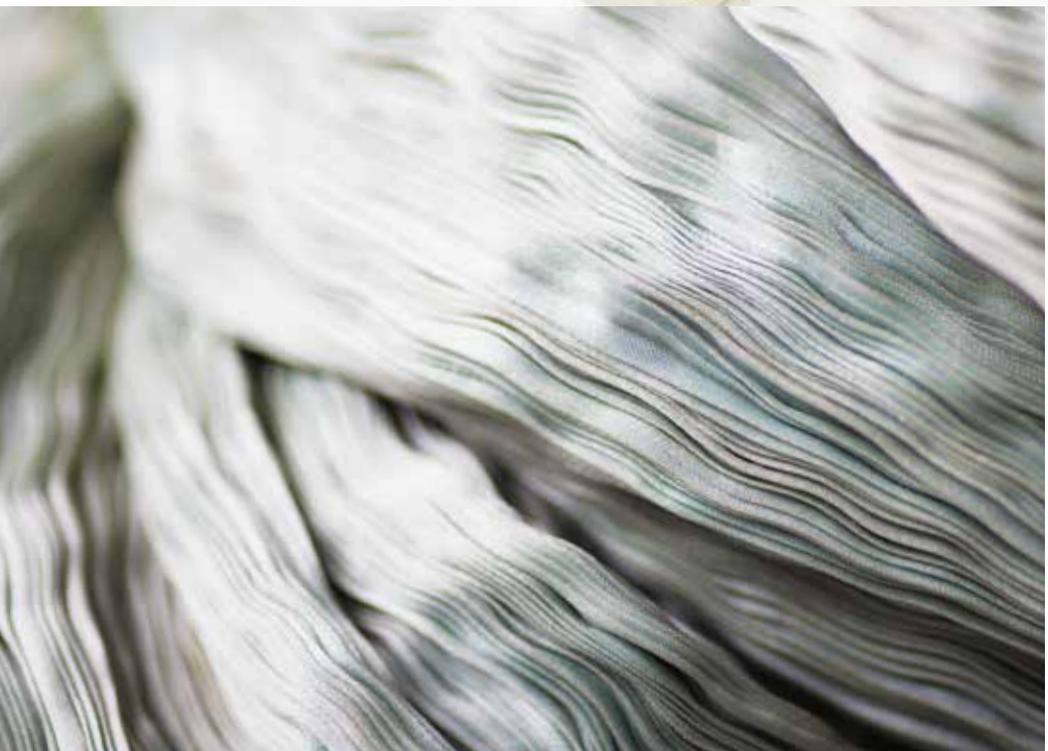
杉原さんは1977年生まれ、福井県出身。東京学芸大学音楽科を卒業後、福井県で音楽教師として教鞭をとる傍ら、様々な現場にて多岐にわたる音楽活動を展開されています。2002年秋冬シーズンから十数年にわたり、友人である森永邦彦氏のファッション・ブランド「ANREALAGE」のコレクション音楽を担当。各コレクションのテーマを杉原さんの視点で深く掘り下げ、シーズンごとの世界観を音楽で表現してきました。また、この時の音楽をピアノソロで収録し、CD「ANREALAGE SOUND」で「遥か晴る。」として発表されています。

ドビュッシーやラヴェルなどフランス印象派の音楽から大きな影響を受けたという杉原さん。そんな杉原さんが選んだK C I の収蔵品は、20世紀初頭、ベネチアで活躍したデザイナー、マリانو・フォルチュニイのドレス。繊細な襷が美しいこのドレスを、杉原さんはどのような音楽で表現したのでしょうか。



作曲家・ピアニスト×K C I 収蔵品
ゲスト

杉原一平 Ippei Sugihara



ピアノ曲

「Acqua ~Mariano Fortuny~」制作によせて

杉原一平

とある夏の日、
100年ほど前にマリアノ・フォルチュニイによってベネチアで制作された
「デルフォス」ブリーツドレスを拝見させて頂いた。
その艶かしいほど美しい線と、何とも言えない煌めきに息をのんだ。

そして、

「これはベネチアの運河の水面そのものだ！」

彼は洋服という媒体にて、これをデッサンしたのだ！」

私はこのように確信し、興奮を覚えた。

彼のクリエイションに敬意を表して、

私も運河の水面の様子をピアノを用いてデッサンしてみよう。

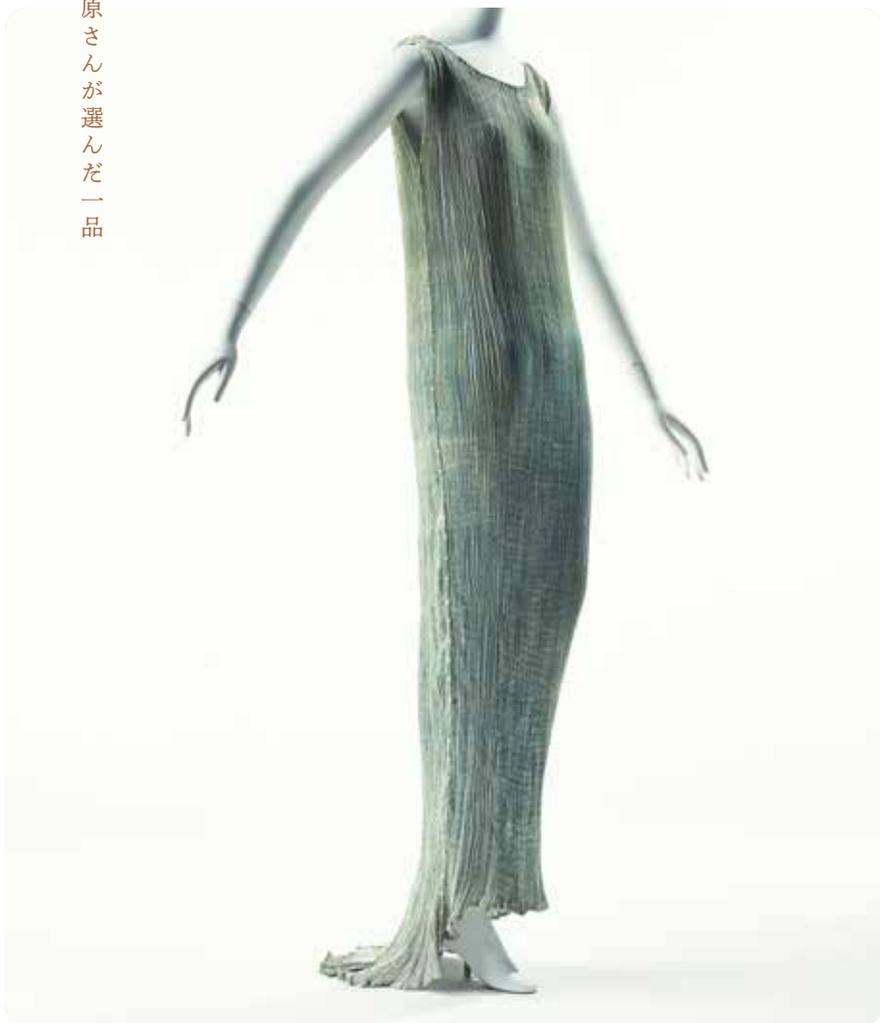
気ままにたゆたい、分岐し、停滞し、煌めき、昇降し、光の彼方に消えて行くその様を。
重力と光に身を任せて、エレガントに運動を継続するその様を。

ありのままにピアノでなぞってみよう。
注意深く。

そうすることで、彼のクリエイションの秘密に少しでも近付いてみたい。

彼の靈感の源に触れてみたい。

この作品は、その探求の小さな記録である。



杉原さんが選んだ一品

マリアノ・フォルチュニイ ドレス「デルフォス」

1910年代 イタリア

京都服飾文化研究財団所蔵 畠山崇撮影

ベネチアを拠点に活躍したフォルチュニイは、1907年頃から絹地にブリーツ加工を施したドレス「デルフォス」を制作した。肩からゆったりと落ちるブリーツがやさしく身体をなぞり、両サイドに付くトンボ玉の装飾は、薄く軽やかな生地を安定させる重りの役目も兼ねている。フォルチュニイは服飾のみならず、絵画や舞台美術、室内装飾でも才能を発揮した。彼の類まれな美意識は、20世紀初頭のさまざまな芸術を色彩豊かに彩り、今なお多くのアーティストにインスピレーションを与えている。



ピアノ曲「Acqua ~Mariano Fortuny~」をYouTubeでご視聴いただけます。
<https://youtu.be/q3gAVETjoSw>

Acqua - Mariano Fortuny -

C dur, C^{o7}, E^{o7}

Flow (carefree)

E dur, F^{o7}, G^{o7}

Flow (carefree)

G dur, A^{o7}, B^{o7}

Flow (separate)

A dur (rubato), G dur, C^{o7}

Flow (stagnate)

F dur (Alz.), C

Flow

Des dur, C^{o7}, D^{o7}

Flow (sparkle)

Ges dur, C^b, D^b, E^b, B^{b7}, G^b, A^b, G^{b/o}

Flow (up & down)

Fis dur, B, C[#], D[#], C^{#/F}, F[#], G[#], F^{#/A[#]}

Flow (carefree)

A^{o7}, B^{o7}, C^{o7}, D^{o7}, E^{o7}, D^{o7}, C^{o7}, B^{o7}, A^{o7}

Flow (disappearing into the light)

Ippei Sugihara

sep. 27. 2017.



右：ドレスの内側に記されたレーベル。
上：ドレスの両サイドにはいくつもの小さなトンボ玉が付けられている。
ガラス製のトンボ玉は数百年にわたるベネチアの特産品。
下：ドレスの肩部分。





着せ替え人形

素材・技法：紙、銅版、手彩色 原産地：フランス
製作年：1840年代前半

日本で着せ替え人形といえば、こどもの玩具というイメージがあるが、これらは大人の女性向けのもの。ディテールの描き方が緻密で本格的だ。ドレスや帽子は端のみが糊付けされ、その中に人形の体がすっぽり入る構造になっていて、後ろ姿も楽しめる凝りよう。この着せ替え人形は、当時のファッション雑誌の付録として配布されていた。まだ既製服がほとんどなかった当時、女性達はこの人形をもとに自分のドレスをオーダーしたり、コーディネートに参考にしていただった。(筒井)



袋状になったドレスの間に、人形を通して着せ替える。





南洋の貝殻からできた貝ボタン。表面に模様が刻印されている。

KCI収蔵品



デイ・ドレス

1882年頃 ヨーロッパ

京都服飾文化研究財団所蔵
成田舞撮影



地産街道を行く⑧

奈良 貝ボタン

KCIの収蔵品にみられる技法や
素材を手がかりに、各地を訪れます。

江戸時代末期の1867年。片山淳之助こと福澤諭吉は著書『西洋衣食住』※でボタンの扱いに四苦八苦する様子を書き記している。とくに用を足し終えた時は厄介で、

「ウシロノボタンハ手サグリニテ掛ルコトユヘ衣服ニナレザル間ハ甚ダ不便利ナリ」。

「後ろのボタン」とはズボンとサスペンダーを留めるためのボタンのことのようにだ。本書を著すまでに渡米、渡欧を重ね、西洋文化に親しんだ諭吉でさえ、洋服の着かたには手を焼いていた。無理もない。日本では長い間、着物の留めや締めには帯や紐を用いてきたのだから。

※本書は、慶應義塾生の片山淳之助の名を用いて福澤が著したとされる。

ドレスを飾る南洋の輝き

ヨーロッパの衣服に目を向けてみよう。緩やかな形の衣服が主流だった中世後期を過ぎると、衣服は身体に合わせた細身のスタイルへと変化した。狭くなった身幅は、着脱に不可欠な開口部とそれを留め合わせるための穴とフックを必要とした。フックになるものは紐でも鉤爪でもいいのだが、次第に実用性と装飾性が求められていくなかで14世紀ごろからボタンの使用が盛んになっていく。素材は木や動物の骨、角、牙をはじめ、18世紀ごろにはメタル、ガラス、金糸銀糸や絹糸で刺繍したものなど、装飾性豊かなものが登場した。とりわけ18世紀から19世紀にかけて急速に人気を得たのが貝殻の内側から削り出された貝ボタンだった。KCIが所蔵する1882年頃に作られたヨーロッパ製のドレスにも、南洋の貝殻からできた淡く輝く貝ボタンが付いている。職人たちは遙か遠い南の海への憧れを込めてボタンに加工したのだろうか。ロマンを感じる。

日本製の貝ボタンを求めて

さりとて、これはヨーロッパに限った話ではない。日本で貝ボタンを製造している主要産地は、奈良県川西町。海から遠く離れた近畿の内陸地なのだ。なぜこの地で貝ボタンの製

- 10  **検品**
等級別にボタンをより分ける
- 9  **磨き**
木箱にロウをつけた粉とボタンを一箱に入れて1時間ほど回転する
- 8  **艶出し**
木箱にボタンと熱湯と数滴の薬品を入れ、1時間ほど回転する
- 7  **彫刻**
文字や模様を刻印する
- 6  **化車かけ**
角を取るために化車という箱にボタンと砂と水を入れ、数時間回転する
- 5  **窄孔**
穴を開ける
- 4  **型付け**
裏表を確認し、機械にセットする
- 3  **すり場での調整**
厚みを一定にするために両面を削る
- 2  **ロールかけ**
ボタンの原型を厚さ別により分ける
- 1  **くり抜き**
貝殻からボタンの原型をくり抜き、上質なものが(株)トモイへ運ばれる

図A：ボタン加工の主な工程



貝ボタンの見本帳。
定番品で6万種類を数える。

原料となる様々な南洋の貝



株式会社トモイ社長、
伴井比呂志さん



造が盛んになったのか。稲穂が垂れる初秋の田園地帯を抜け、県北部に位置する川西町を訪れた。

貝ボタンの製造で国内シェアの約半分を占める株式会社トモイは、大正三年（1914年）に創業した老舗だ。創業当時の日本は、赤レンガ造りの東京駅やルネサンス様式の帝国劇場が落成するなど街並みが西洋風へと様変わりし、衣服も男性服や子供服を中心に洋装化が進もうとしていた。ボタンは洋装に不可欠な部品として徐々に需要が増し、貝ボタンはその主流となった。3代目の社長の伴井比呂志さんが日本における貝ボタン製造の歴史を話してくれた。「製造技術は明治の半ばごろにドイツ人技師によって伝えられました。最初は神戸へ、そして大阪から奈良へ伝わったと聞いています。ここ、川西は6つの川が流れていて、大阪との河川舟運の要所だったので、産地にも適していたんでしょうね。」支流は大和川に合流し、大阪湾へと注ぐ。明治時代後期、川西のある商人が貝ボタンに商機を見出し、地の利を活かして製造を始めたところ、徐々にこの地域で広がったのだという。昭和の半ばには最盛期を迎え、町内の唐院という地区で製造に従事していた人は400世帯のうち300世帯にものぼったらしい。「最近ではポリエステル製のボタンが増えたので、貝ボタンの製造者はずいぶん減りました。国内でやつてるのはもう3〜4軒くらいでしょうね。うちは今も社員15人で貝ボタンをせっせと作っています。」創業から103年。伴井さんはその間に渡

伊して技術を学び、研鑽を積んできた。

「貝ボタンは大きさの大小も数えると、定番品で6万種類ほどあるんですよ。」見本帳にずらりと並んだ貝ボタンは、どれも深みのある艶々した光沢を放っている。見る角度によってオーロラの色合いに変化する様がなんとも美しい。「原料となる高瀬貝、白蝶貝、黒蝶貝はインドネシアやパプアニューギニアで採られます。これらの貝殻から丸くり抜いた上質なものを輸入して、うちで加工するんです。」原料の貝殻は巻貝や二枚貝で、日本ではあまり見られないような大きいものもある。どれもいびつで厚さもさまざま、一つとして同じものはない。こうした天然素材から均質なボタンの形になるまでに、どのような工程をたどるのだろうか。

ハイテク技術と職人の勘が生む小さな煌き

「作業の様子をお見せしましょう。」と伴井さんに促され、貝の粉で一面真っ白になった工場へと足を踏み入れた。あちこちの機械が重々しい音をたてながら動いている。そのなかに小さな丸い貝が一つずつ上向きにセットされ、くるくると回転している機械があった。「これは窄孔せうこうといって穴を開けているところですよ。」ボタン加工は主に10工程（図A）あり、窄孔はその中程だという。貝の上を鋭い針が規則的かつリズムカールに上下に動き、あつという間に4つの穴ができていく。「硬



口ウをつけた粗とボタンを入れて、約1時間回転し、表面を磨く。



全国の様々なメーカーから刻印の依頼が届く。



高品質な貝ボタンが生み出されていく。



職人の手技と最新のコンピュータが一体となり、作業が進んでいく。



両面を削った後のボタン。この後、穴が開けられる。



レーザーで焼いて、模様や文字を刻印する。



ボタンを1つずつ機械にセットし、穴を開ける。

こともあったそうなんですけどね、僕は粗がいいと思うんですよ。この辺りは米どころですしね(笑)「服や手に引っかけらず、するりとボタンホールをくぐる貝ボタンはこのような手間のかかる工程を経っていたのだった。「そうだ、あのカーディガンのボタンを貝ボタンに取り換えよう。」小さきものへの愛着を感じながら、川西町をあとにした。

福澤論吉がボタンに苦心していた時から150年の月日が過ぎ、今ではボタンを一つも掛けない日がないくらい日常に根付いている。そして昨今はボタンだけでなく、ファスナーやスナップ、ベロクロなど、より利便性の高いものの使用がますます広まってきた。しかしシャツやジャケットの真んなか、袖口の端には、やはりボタンが似合う。そして、数百年ものあいだ職人の手を介し、小さく静かにその存在を輝かせてきた貝ボタンには、他には代えがたい温かい趣きが漂っているように思う。

取材文・筒井直子 写真・福嶋英城

い貝に穴を開けるので、常に針を程よく研いでおかなければなりません。職人はこうした道具を自分達で作っているんですよ。」機械の周りを見渡すと、様々な形の刃物が数多く並んでいる。これらは貝の種類やボタンのデザインによって使い分けるのだという。機械化された工程であっても、そこかしこで職人の技や長年の勘がその工程を支えているのだ。

「模様や文字の刻印の注文も多くて、このレーザー彫刻機で刻印していきます。」シュー、パチパチという小さな音をたてて、みるみるうちに文字が刻まれる。「文字を残してそれ以外の部分をレーザーで焼くものもあります。」わずか直径1センチほどの小さなボタンの表面にブランドの文字が整列しているのを見ると、特別で贅沢な気分になつてくる。どんな服に付けられるのだろうか。想像が膨らむ。

これで完成かと思っていると、次に「艶出し」と「磨き」工程の作業場に案内された。さつきまでの機械を配置した部屋とは違い、木桶やザルが並んだ部屋はさながら昔の農家のようだ。「艶出しのために、この木桶にボタンと熱湯と数滴の薬品を入れて約1時間回転させて、その後に磨き加工をします。ロウをつけた粗とボタンを一緒に入れて1時間ほど回転させるとサラサラのボタンになります。出来上がったボタンを触ってみてください。」桶いっぱいに入ったピカピカのボタンのなかに手を入れて掴もうとすると、手からスルスルとボタンが滑り落ちていく。「かつては麦やスイカの種で磨いた

取材にご協力頂いた企業・団体(敬称略)

株式会社トモイ

奈良県磯城郡川西町唐院201

問い合わせ: 074514410066(代表)

ホームページ: <https://www.shellbuttons-tomoi.jp/>



KCI 収蔵品の補修、
保存を行う「補修室」より
日々の奮闘を綴ります。

今日の補修室

TODAY'S RESTRATION ROOM

第 8 回

衣装補修のビフォー・アフター②



前号に引き続き、
衣装補修のビフォー・アフターを
ご紹介します。

補修後

アフター



ジュニール糸を整え、スパンコールをつけ直し、裏からチュール地をあてた。



ドレスから落ちたスパンコールを位置と大きさを見分けながら付け直した。

補修前

ビフォー



ジュニール糸が外れて絡まり、スパンコールが落ちて、裏打ちのチュール地も欠損している。



スパンコールが落ち、付け位置の下書きと緑青の後が見える。

今回ご紹介するのは、1900年頃に作られたパリの高級仕立服店「ウォルト」製ドレスの補修です。この作品はKCIに来た当初、ドレス全体の生地弱りや破れに加え、スパンコールが沢山落ちたり、ジュニール糸（モールのように毛羽立った飾り糸）が外れたり、かなりダメージがありましたが、全体に大掛かりな補修を行い、元の姿を蘇らせました。まず生地を補修布（今回は絹の羽二重とチュール地）で裏打ちしたあと、ジュニール糸の痕跡をたどって、元の位置に縫い留め直していきました。同時に、

ドレス全体に付いていたスパンコールは、生地に付着した緑青の痕跡から位置と大きさを特定し、元通りに付け直しました。このように装飾の修復の際は、オリジナルの装飾の付け跡を根気よく見つけていくことが重要なのです。

きらびやかな雰囲気を取り戻したこの作品は、2009年に京都国立近代美術館と東京都現代美術館で開催された「ラグジュアリー ファッションの欲望」展に出展されました。（上山尚子）

補修された収蔵品

ウォルト
イヴニング・ドレス
1900年頃 フランス

京都服飾文化研究財団所蔵
広川泰士撮影



（本品補修担当：谷智恵美・塩野美津恵・藤井久子・上山尚子）

教育普及活動

博物館実習：学芸員になるために

日時 | 2017年8月28日-9月1日

会場 | KCI レクチャールーム



KCIでは毎年、大学生向けに博物館学芸員資格の取得に必要な「博物館実習」を行っています。今年度は留学生も交えた14名の実習生を受け入れました。5日間の実習期間の中で最も熱気が高まるプログラムのうちのひとつ、マネキンへの衣装の着せ付けの様子をご紹介します。

この実習では、2時間近くかけて、補修室スタッフの手ほどきを受けながら、18世紀から19世紀のドレスのレプリカなど全部で10体を着せ付けました。ドレスの下にはコルセットやクリノリンなど当時と同じように下着も着せます。コルセットは、靴紐を締める要領でたくさんの穴に通った紐を締めていかねばならず、なかなか体力と根気のいる作業です。見る機会のそうそうないドレスの内側の構造に驚きながら、一生懸命着せ付けに取り組んでいる学生さんたちの様子が印象的でした。

博物館実習は、展覧会の裏側の仕事を学生さんたちに体感してもらえ大切な機会です。参加していただいた14名の方々には、その後どのような記憶として残っていくでしょうか。(松坂)

収蔵品の貸し出し

「Items: Is Fashion Modern?」展

会期 | 2017年10月1日-2018年1月28日

会場 | ニューヨーク近代美術館 (MoMA)

KCIの収蔵品は、今の私たちの服飾文化を繙くために重要なものばかりです。KCIは、国内外の美術館から、これらの収蔵品を展示したいという依頼をしばしば受けます。

現在KCIは、MoMAで約70年ぶりのファッション展となる「Items: Is Fashion Modern?」展に収蔵品を貸し出しています。この展覧会は、20-21世紀のファッションに大きな影響力を持った衣服やアクセサリなどの「アイテム」111種類の過去と現在、そして未来を考えるというもの。KCIからは、Y-3 (Yohji YamamotoとADIDASがコラボレーションしたブランド)のウェアや、なかやまちえこがきやりーばみゆばみゆのために手掛けたネイルなど9点を展覧しています。



KCI ギャラリー展示

「収蔵品紹介 25：私と一緒に出かける？ - 19世紀後半のコートとケープ」展

会期 | 2017年9月25日(月)-12月22日(金) (土日・休館)

会場 | KCI ギャラリー (午前9時30分-午後5時 [入館は4時30分まで])

KCI ギャラリーをご存知でしょうか。1室だけの小さなギャラリーですが、年に約3回テーマを設定し、KCIの収蔵品を紹介しています。

今回は、19世紀後半に作られた、パリの高級仕立服や既製服の外套類12点を展示しています。ゆったりと着られる外套類は、ドレスと比べて製作に厳密なサイズを要求されず、デパートで既製服としても販売されるようになり、当時、上流階級だけでなく新興の中産階級の手にも届くようになっていました。

既製服といえども、現代の我々の目から見ると豪華絢爛。訪れた人からは「今私を着たいわ!」という感嘆の声も上がりました。無料でご覧いただけますので、是非一度、覗きにいらして下さい。



阿佐美淑子

Yoshiko Asami



三菱一号館美術館学芸員。専門は染織を中心とした装飾美術、東西交流史。主たる担当展覧会に、「田圃讃歌—近代美術に見る自然と人間」展、「KATAGAMI Style」展など。現在、服飾・デザイン系の展覧会を準備中。

海外に出ると、街の小さな宝飾店に目がいってしまいます。日本では一万円札が何十枚もないと手に入らないような、大ぶりの石の付いた、不思議な魅力を発する指輪や首飾りが見つかることがあります。最初は調査で赴いた英国のリーズでした。仕事を終えて気分転換に街に出ると、魔法のようにある店のウィンドウに引き寄せられました。見せてもらったのはセカンドハンドの指輪。実際より大きく見える楕円のオパールを小さなサファイアとダイヤモンドが交互に取り巻いています。少し悩んで購入。海外出張にいつもついてきてくれる、文字通り、大切な宝ものとなりました。

成田舞

Mai Narita



フォトグラファー、一児の母。雑誌やwebなどさまざまな媒体で撮影に携わる。写真集「ヨウルのラップ」（リトルモア、2011年）。<http://www.naritamai.info/>

10年前にロンドンに滞在していた時に古着屋で青いチュールのブラウスを見つけた。小さな白い水玉模様、襟はボウタイで袖はシースルー。ふわっとした形と濃い青色を一目で気に入るじきに寒くなるのについで購入してしまった。こんなに素敵なのに誰がどうして手放したんだろうか。当時の私の英語力ではその服の来し方を店員に尋ねるような気持ちになれず、また来てみようと思いつきながら場所を忘れてしまい、幻のような買い物体験として心に残っている。

富澤洋子

Yoko Tomizawa



ポーラ文化研究所 学芸員・司書。主な研究領域は近代日本の化粧文化史。著書『よそおいの楽しみ、かざる悦び—アール・ヌーヴォー期の銀装手鏡』、共著『明治・大正・昭和の化粧文化』（ポーラ文化研究所発行）

昨年モスクワに友人を訪ねる際、必ず買おうと決めていたのが民族調のショール「プラトーク」だ。モスクワの町は比較的治安も良く、広場や博物館など観光名所ならひとりで行くことも可能だけれど、買い物は現地に住む友人の助けを借りるに限る。友人が連れて行ってくれたのは、同じような外観の建物が並ぶ繁華街の2階に上居するプラトーク専門店。素材や大きさなど、早口な店員の説明を翻訳してもらいながら選んだ、赤い花模様一枚は、今年の冬も首もとを暖かく華やかに包んでくれるだろう。

服をめぐる

編集後記

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第8号
2017年11月30日発行（年3回発行）

発行：公益財団法人 京都服飾文化研究財団（KCI）
〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103
電話：075-321-9221

ウェブサイト：<http://www.kci.or.jp/>

編集：筒井直子、福嶋英城、松坂雅子（京都服飾文化研究財団）

デザイン：坂田佐武郎

写真：成田舞、福嶋英城

3年前のこと。友人から作曲家でピアニストの杉原一平さんを紹介され、いつかKCIの収蔵品に音楽をつけてもらいたいと夢みていました。その念願が叶い、今号の「一人一品」にとても美しいピアノ曲を寄せて頂きました。この曲とフォルチュニイのドレスの裏に触発された写真家の成田舞さんの写真作品も素敵です（p.10～11）。フォルチュニイの衣装が制作されてからおよそ100年。時を超えたアーティスト達のコラボレーションをぜひお楽しみください。（筒井）